

霧と旅人は空を歩く。

ここに残るのは空の箱だけ。

「ねえ、先生」

「あの塔で回っているのは何？」

「風車？」

「上れるのなら、上ってみたい。行こう」

「いい眺めだね、先生」

「静かだ」

「どうしたの、ニトロ。」

「塔？」

「ああ、あれは風車だよ。風車小屋。」

「風を受けて、くるくる回るんだ。」

「その力で、たとえば粉を挽いたり、電気に変えたりしてたんだよ。」

「中はどうなってるんだろ。」

「壁の途中にバルコニーが見えるね。」

「うん、いいよ。行こうか。」

「そうだね、風が穏やかで気持ちいい。」

「ずーっと遠くまで、景色がよく見える。」

「いいところだね。」



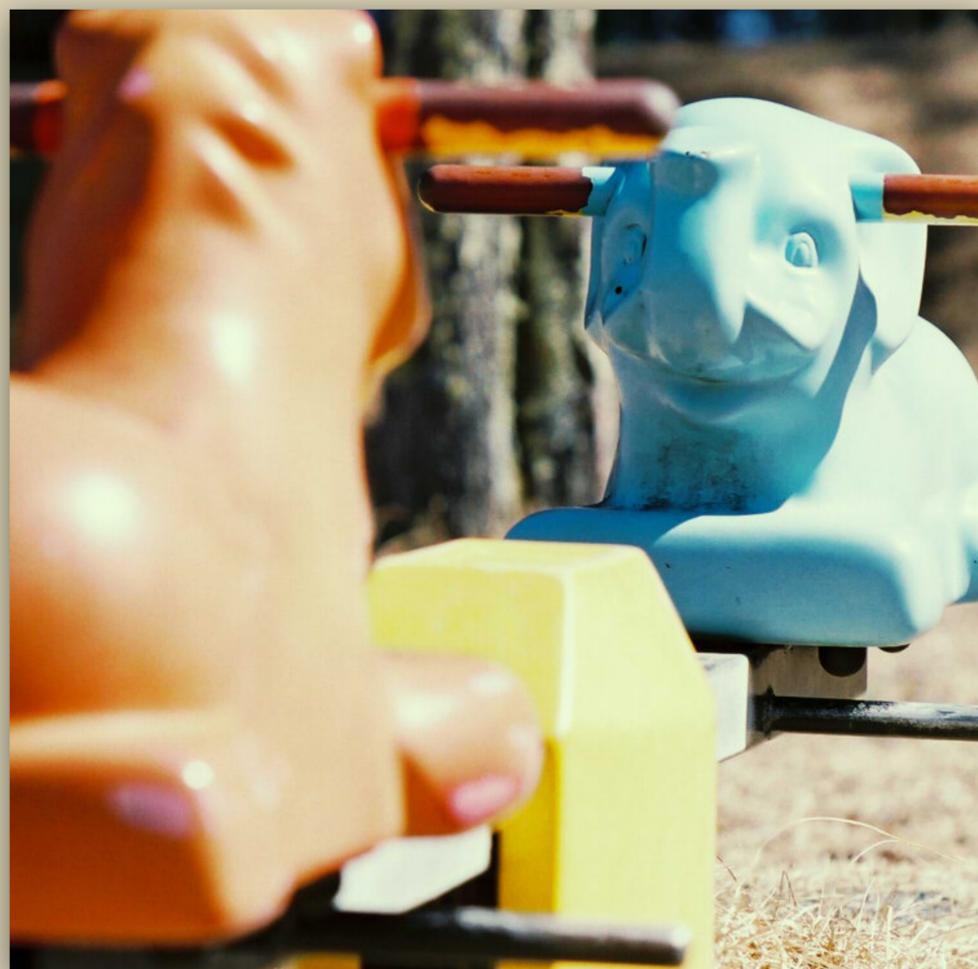
その朝、ぼくが目を覚ましたとき、先生はもう動かなくなっていた。呼びかけても返事はなかったし、肩を揺すっても机に伏したままだった。ガラスも抜けた窓から風が抜けて、細かな塵と淀んだ空気をさらってゆく。その行方を追うようにぼくは、がらんとした部屋を見渡してみた。ゆうべ切ってくれた果物のかたわらからナイフだけがなくなっていることに気づく。在り処はすぐ明らかになった。どうりで鉄っぽい臭いがするわけだった。覗き込んでいた顔を上げると、ふと机の上で鈍く光るものが視界に入った。先生の白い万年筆。その下に1枚の紙きれと写真。写真の方には見覚えがあった。快晴を背にした鋼鉄の羽根。昨日先生と通ったばかりの風車小屋だった。紙きれの方にはこう書かれていた。『君の行きたいところへ行けばいい。』元々は、目的地も終着点も、寄り道も遠回りもない一人旅だった。それがある日二人旅になって、今朝また元に戻った。行きたいところも特になかったけど、次にどこへ行こうかはもう決めた。写真と紙きれをかばんにしまって、がらんどうの出口へ向かう。一度振り向いて、声をかけた。もう聞こえていないだろうけれど。さようなら、先生。それをいつから持っていたかは分からない。ただ、ぼくだけのものだから大事にするよう先生からは言われていた。着慣れたコートの右ポケットにいつも通り手を差し入れて歩きだす。手のひらほどの大きさ、硬質の白い立方体が変わらずそこにあった。



外へ出ると、辺りはまだ夜の気配を濃く残していた。ぼくは歩きだす。道はなだらかな下り坂になっていて、青く沈んだ景色が遠くまでよく見渡せた。先生に出会う前も、出会ってからも、ぼくはずっとこうして歩いてきた。その旅路のなか最初に出会ったのが先生で、そしておそらく最後ではないかと思う。もうどこへ行こうと、靴音が鳴ったならそれはぼくのもの以外にありえない。先生が死んだというのは、つまりそういうことだった。気づけば並び立つ木々は金属になっていて、その森は送電所というらしかった。複雑で規則的に編まれた枝はたえずうつり変わる幾何学模様をなしている。もう少し進むと、ひととき目立つ鉄塔がそびえ立っていた。先生は、だいたいなんでも知っている、と出会ったばかりのぼくに話していた。赤と白で塗り分けられているものは数えて7段、というのも先生から聞いた。以来、見かけるたびに数えているけれど、なんでも知っているのは確からしい。それでこの鉄塔だけなぜ形がちがうのか、昨日通ったとき先生にたずねてみた。すると、これは遠くの人と話をするためにあるものだったらしい。付け加えて、もう使えないだろうし、その相手もないけど、と。見上げる横顔がつぶやいていた言葉を、ぼくは思い出していた。もしかしたら、【霧】が使っているかも。たずねる間もなく、先生はまた歩き出した。見上げるのをやめて、ぼくも背中を追った。これが昨日の夕暮れどきのこと。今は間違いようがなく朝だったし、事実、追う背中ももうなかった。



ぼくはまたしばらく歩くと、謎めいたそれを仰ぎ見るべく立ち止まった。平たく角ばった石柱が何本も連なり立って、やけに細長い屋根を支えている。先生に言われるまで、それが何なのかぼくはわからなかった。けれど離れて見るとなるほどたしかに、それは丘と丘をつなぐ巨大な橋だった。渡ってみたいとは思いつつも、ぼくは橋の脚もとを歩いてくぐった。たどり着いた丘の裾、ぽっかりと空いたほら穴の前に立つ。内部は今もまだ灯りが点いていて、ずっと奥から風の抜ける音がしている。ぼくは少し冷えた橙色の薄闇へと、一步踏み入れた。靴音が闇の中をこだまして、幾重にもぼくの後を追いかけてくる。こういう場所を歩くとき、ぼくはきまって不思議に思うことがある。追いかけてくる靴音は、本当に反響でしかないのだろうか、と。もしかしたら一步前のぼくの足音が、鳴り重なっているのかもしれない。過ぎ去ったいまが積み重なって、それが過去となるように。けど一步前のぼくはもうそこにはいないし、過去の記憶だって、そのものの姿形はない。そういうようなことを先生に話したら、面白いね、と言ってくれた。姿形なんてなくても存在できるものがあつたらいい、とも。ぼくは自分が何人もいるというのはどんな感覚なのだろう、と考えていた。やがて遠くにぽつんと白い穴が現れて、次第に広がっていく。出口だ。暗闇を出てみると、ぼくはやっぱり一人だった。



ゆるやかな斜面を道なりに進んでいって脇の木立を抜けると、ひらけた野原に出た。赤い砂利の敷かれた小径が丘を取り囲み、その向こう側へ続いていた。ぼくは砂利敷きを外れて小高い丘を目指す。草を踏む感覚が靴越しでも伝わった。ようやくてっぺんまでたどり着くと、色とりどりの遊具が少し離れて見下ろせた。下る斜面を勢いよく駆けていく。上がっていく速度、最後は転んで止まった。仰向けになって、しばらくそのままだった。空の高いところで風が鳴っていた。気も済んだところで起き上がって、遊具のひとつに向かう。鎖でつながれた赤い板に腰かけると、反動をつけて宙へと漕ぎだした。だんだんと景色が目まぐるしくなってきた、体が浮かぶような感覚すらおぼえる。それはまるで青空に吸い込まれゆくようで、けれど決して叶わないようにも思えた。揺れる板の上でぼくは立ち上がり、高くなったところで思いっきり跳び出す。宙に投げ出されたぼくは、しばしの浮遊感ののち着地した。空席になったブランコは軋みながらまだ独りでしばらく揺れていた。先生は下手なので、足で減速させながらこわごわと止まっていたのを思い出した。どうも体を動かすのが苦手らしく、他のだいたいの遊具でももたついていた。まともに遊べたのはシーソーぐらいで、それはぼくが向かいに座っていたからだ。さっき丘で転んだのは、先生の真似だった。あれはあれで、割と楽しかったけど。ただ先生は、楽しくなかっただろうと思う。転ぶのも、ブランコも。けれど何でもやりたいようにさせてくれて、いつも付き合ってくれていた。シーソーはどうだっただろう。見え隠れしていた表情は思い出せなかった。



気づけばもう夕暮れだった。暗くなったら歩かないことにしている。そろそろ寝るところを探さないといけない。歩調を速めながらもぼくは、かなたに光の落ちていくさまを眺める。西日には濃い橙色が融け込んでいて、照らされたすべてが橙色を譲り受けている。そのかわりに自身よりはるかに大きな影を、見とれる背中に負わされていた。ぼくにも、ぼくよりずっと背の高い影が傍らをついて歩いていた。かつて夕暮れの空は、もっと、ずっと赤かったらしい。直接的ではなくともそれが原因だったと、誰もいないことに関して先生は言っていた。それはどういうことなのか、ぼくは尋ねてみた。すると先生は冗談めかして、笑いながら答えた。赤い夕暮れがあまりに綺麗だったから、その中に自分もいたかったのかもしれない。どこまで歩きつづけたとしても、追いつけやしないのにね。



夜がきて、ぼくは倉庫らしき場所の冷たい壁にもたれて座っていた。寝る時はきまってなるべく暗い場所を探す。ここは月明かりもほとんど入ってこない。ぼく自身がどういう姿形をしていて、それがどこにあるのか。夜の底ではそれらがなんとなく曖昧になる。ぼくはその感覚が好きだった。決まった形をもたない夜の一部分になって、そのどこにでもいられる気がした。何故だかとても懐かしく思える。先生も、もしかしたら夜のどこかに今だっているのかもしれない。先生が死んだ理由と同じように、確かめようはないけれど。右のポケットに入れたままの手は、なお変わらない箱の存在を確かめていた。気づいた時には旅をしていたように、この箱もいつからとは知れず持っていた。そして理由こそ知らないけれど、大事なものであることも。だから、かつて先生がそう言ってくれてぼくはとても安心したのをよく覚えている。あてもなく歩いていたけれど、やっとどこかに帰り着いたような気がした。ぼくは箱を大事に握りしめて、目を閉じた。意識がゆっくり遠のいて、そして夜の底でとけて消えた。



翌朝、目を覚ますと向かい側の壁に先生がもたれてこちらを見つめていた。「おはよう、まだ眠そうだね。」先生が呼びかけた。先生はいつも寝ぼけたような顔だから、眠いのかそうじゃないのかよくわからない。とにかくぼくは挨拶を返そうとした。「先生、おはよう」けれどその声は、ぼくの声じゃなかった。目を覚ましたのはぼくじゃなかった。「今日はどこへ行こうか、ニトロ？」先生がぼくの名前を呼んだ。けれど呼ばれたのは、ぼくじゃない誰かだ。「もう一度、あの風車小屋に上りたい」答えたのも、ぼくじゃない誰かだ。ここでぼくは、これが夢だとわかった。なぜならこの夢の中に、ぼくはどこにもいないからだった。「うん、さようなら。」先生の、聞きおぼえのない台詞。けれど幾度となく聞いたような気もした。



朝になって、目を覚ますと、向かい側の壁には誰もいなかった。右手に箱があることを確かめたぼくは、それだけですぐに出発した。もう少し歩けば目指していた場所、——風車小屋に着くはずだ。先生が残した写真がそうさせているのか、ぼく自身がそこに行きたいからなのか。それははっきりとはわからなかった。けれどとにかく今は、風車小屋を目指して歩いていた。そこに何があるわけでもない、ただ今のぼくにはそうするしかなかった。ふと顔を上げる。きれいな朝焼けだ。金色の光線が澄みきった空気を抜けてゆく。まぶしくて、静かで、少し肌寒い。ため息が白く染まってはすぐに霧散する。その消えるさまを眺めてぼくは、なにか思い立って軽やかに一歩踏み出す。後ろ足で跳ね上がって、前方へ躍り出る。空中で足を入れ替えて。一瞬だけの着地。そのまま再び地を蹴り上げる、宙へ跳ぶ。宙へ、地へ。宙へ、地へ。一定のリズムが形成されてくると、あたりを見渡す余裕ができた。世界が揺れている。ぼくと踊っているのだった。もしもいまここに、ぼくじゃない誰かがいたならば。そう感じるだけだよ、と笑ってくれたかもしれない。けれどいまぼくは、世界と踊っていた。それだけが、ただここにあった。



ぼくは歩を止め、そして見上げた。そこには何ひとつ変わらない、鋼鉄の羽根が静かに風を受けていた。黒い鳥がたった一羽だけ、留まっている。その鳴き声に返事が来ることはなく、広場にむなしく響いていた。ぼくはポケットの中の箱を握りしめて、しばらく立ち尽くしていた。何も変わっていないはずなのに、何故か言いようもなく寂れた景色だった。風が吹いて。鳥が飛び立って。そして、風車が回った。ぼくは深い呼吸をひとつして、風車小屋の扉に手をかけた。



そこで待っていたのは、ぼくが持っているのと同じ、硬質の白い箱だった。何故あるのか、何故こんなところにあるのか。一度考えてみようとしたものの、すぐにどうでもよくなった。先生がどうしてあの写真をぼくに残したのかはわからない。けれどもしかしたら、この事を知っていて、ぼくに知らせたかったのかもしれない。それが何故なのか、今となってはもう霧の中だった。ただ、一方的に裏切られたような。踏みにじられたような。箱に向かって歩き出す。靴音が、誰もいない風車小屋に反響する。ぼくは、箱を手離した。

僕はずっと、映画を見せられていた。
見ていたのではない。見せられていた。
観客は暗い劇場の最前列、僕一人きり。
劇場には座席もなければ、床も壁も天井もなかった。
登場人物の一人が笑ってこちらに話しかける。
ありもしない座席に凭れた僕にではなく、
スクリーンの中の主人公に。
誰も僕に話しかけることはなかった。



僕はその名前が自分につけられたものだと知っていたし、
僕ではない誰かを指していることも知っていた。
誰も僕を呼ぶことはなかった。
だから君のその提案は考えもつかなかったし、
あの日見た赤色と同じぐらい、好ましいものに思えた。
いわく、僕のことを指す名前を自分でつけたらどうか、と。
結局、君に呼ばれることのないまま
僕があの街から去ってしまったけれど。



だんだんと、この場所へ来ることに嫌気が差してきた。

現れない君を待つのも、君が現れないことも。

やがて僕は逃げ出した。

君に残した短い手紙の、最後の一行。

会おうとも、会えたらうれしいとも、書けなかった。

「こんばんは。」

がらんと響くのはこだまばかりで、

僕は自分が遅かったのだと悟った。

それでも縋るように、引き寄せられたみたいに、

いつもの場所に僕は向かって。

いつもなら君がいたはずの場所には、

小さな紙きれ。

『今まで本当にありがとう。』

またどこかで。』

こんな形で、君の名前を知りたくなかった。

懐かしい声がした。

孤独な劇場のスクリーン。

映し出された、いつもの退屈な映像。

舞台セットの窮屈なテレビの中。

君はあの、いつもの眠たげな顔。

いつもののんびりした声音で。

僕にはわかった。

君は、僕に向けて話しかけてくれていた。

僕が手紙だけ残して街を去った、今もなお。

そして、たったひとつ。

君はプレゼントを届けてくれた。

「MISTと言います。」

画面の君はそう告げた。

それから数か月後。

僕は、映画の中に存在できるようになった。

君と同じ、映画の中。

——白い、小さな箱の役として。

少し、胸が苦しい。

それで僕は、自分が緊張していることに気づいた。

レンズの向こうで、どれだけの目が見つめているんだろう。

けど、そんなのはどうでもいいこと。

ただ一人、たった一人。

これから僕は、君だけに向けて話すのだから。

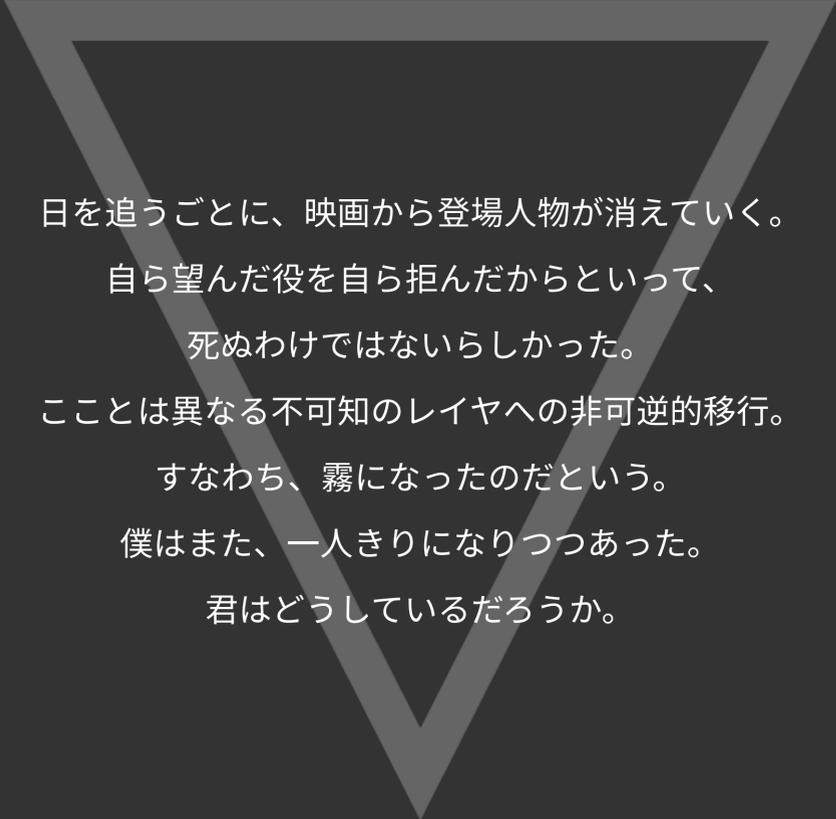
どこにいるかな。

どこかで見ていてくれるかな。

どうか、届くといいな。

そして、もしも喜んでくれるのなら、

僕は何よりうれしく思う。



日を追うごとに、映画から登場人物が消えていく。
自ら望んだ役を自ら拒んだからといって、
死ぬわけではないらしかった。
こことは異なる不可知のレイヤへの非可逆的移行。
すなわち、霧になったのだという。
僕はまた、一人きりになりつつあった。
君はどうしているだろうか。

ほら。

だんだん、君の望んだ景色になってくね。

ほんとは僕、最初から知ってたりして。
だからこそ、ああいう名前をつけたんだけどね。

なのに、ばかみたいだと思わない？

【霧】になったらもうおしまいなのにね。

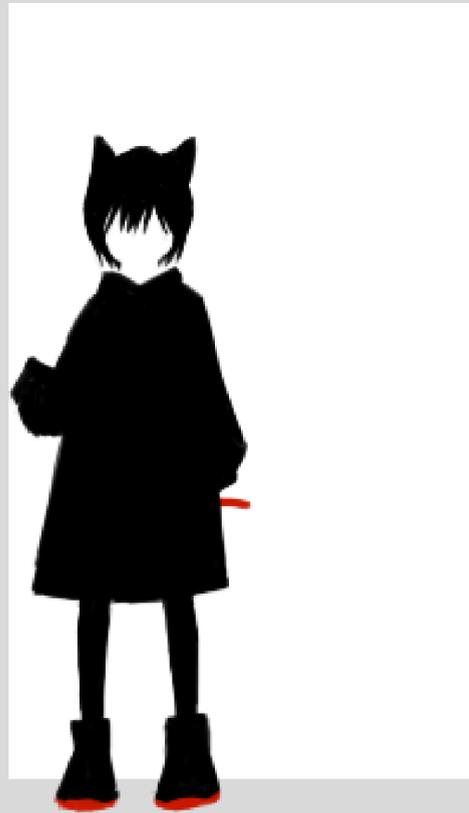
けどきっと、君と僕は大丈夫だよ。

ねえ。

君はいま、どこにいる？

戻らない旅に出る。
文字通り、もう元に戻せないことは知っていた。
けれど痛み続けるぐらいなら、それよりもずっといい。
せっかく君が与えてくれた居場所なのだから。
さて旅立ちにあたって、
僕はこの箱に何を残し、何を手離すべきだろう。
さんざん悩んだ末に僕は、
たったひとつだけ、持って行くことにした。
これだけがあれば、
それで僕と君には十分だったから。





思いかえすといつも一瞬だから、
待ってたのはたいした時間じゃなかったんだと思う。

なにより、君の声がまた聞こえたとき、

僕がどれほどうれしかったことか。

何ひとつ変わらないたたずまいで。

物音に振り返った部屋の入口。

君がいた。

「びっくりした、誰？」

やっと会えた。

ずっと、ずっと待ってた。

ニトロ。



だから君がああ言ったとき、
僕はとても懐かしくて、安心したような心地がして。

そして同時に、ひどく後悔していた。
今もむかしも、君はずっと君のままだったのにね。

僕は、僕として君に会えなかった。
ああ名乗ったのが、何よりの証拠だった。

僕は君を、裏切ってしまった。

踏みにじってしまった。

だからこれから僕のすることは、

君へのせめてもの償い。

赤く染まった君の横顔を思い出していた。



君がたったひとつだけ残して、
他は手離してしまったというなら。
僕はぜんぶ持っていてあげる。
君のことずっと、ずっとずっと忘れない。
形もない、ここにはいない、
君のことずっと覚えてるよ。
そしてここにいる、形ある君と。
ずーっといっしょにいてあげる。
だから、これは最初で最後のさようなら。
そして、3回目の初めましてだね。
僕の名前は、

「ああ。やっと気づいてくれた。」

